

女子の文理選択と進路指導の実態に関する研究：
高等学校教諭へのインタビュー調査をもとに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岐阜大学教育学部附属学習協創開発研究センター 公開日: 2024-05-27 キーワード (Ja): 高等学校, 女子, 文理選択, 進路指導, ジェンダー・ステレオタイプ キーワード (En): 作成者: 岩田, 衣世, 長谷川, 哲也 メールアドレス: 所属: 岐阜大学, 岐阜大学
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000647

女子の文理選択と進路指導の実態に関する研究

—高等学校教諭へのインタビュー調査をもとに—

岩田 衣世^{*1}・長谷川 哲也^{*1}

本研究では、高等学校における文理選択や進路指導の実態を明らかにし、女子が積極的に自己実現を果たすための教育のあり方を考察する。先行研究等をもとに、理系学部へ進学する女子が極端に少ない要因を検討したところ、単に理数科目の学力が男子に比べて低いだけでなく、学校環境や家庭環境に存在するジェンダー・ステレオタイプが女子の理系選択にネガティブな影響をもちうることが示唆された。こうした背景を踏まえ、高等学校における指導の実態を描き出すため、現職の高等学校教諭を対象にインタビュー調査を実施した。その結果、ライフイベントの影響を受けやすい女子の進学には、男性優位の理系領域で活躍するために男子よりも向学心や学力が求められること、実家から離れた大学を受験することや浪人することに対して批判的な保護者の考えに左右されることなど、進路に関わる様々な制限が浮かび上がった。一方で教師としては、こうした状況と葛藤しながらも、生徒の自己認識や主体性に働きかけるような進路指導を展開する重要性が示された。

〈キーワード〉高等学校、女子、文理選択、進路指導、ジェンダー・ステレオタイプ

1. はじめに

女性の活躍や男女共同参画社会の実現が目指されて久しいが、その一環として 2010 年代ごろからいわゆる「リケジョ」と呼ばれる理系の女性研究者や女子大学生、理系の進路を目指す女子中高生を後押しする取り組みが展開されている。例えば、内閣府の男女共同参画局では、女子中高生が理工系分野の進路選択にチャレンジすることを応援するため、理工系分野が充実している大学や企業を紹介したり、各種団体が実施するイベントの情報を提供したりするなど、「理工チャレンジ（リコチャレ）」と称する事業を行っている（内閣府男女共同参画局 HP）。とはいえ、文系／理系という進路選択における男女差は未だに大きい。内閣府男女共同参画局（2019）『男女共同参画白書 令和元年版』によると、理学・工学・農学・医歯学分野における大学（学部）学生に占める女子学生の割合は年々増加しており、2018 年度には農学で 45%に達しているものの、工学や理学では 30%にも満たない。また同白書は、2018 年度時点における女子学生の大学（学

部）で所属する専攻分野の割合も示しているが、人文科学が 20.4%，社会科学が 25.2%であるのに対して、理学が 1.9%，工学が 4.9%，農学が 3.0%，医歯学が 2.2%など、女子学生で理系分野を選択した者はまだ少数派である。

高見・尾澤（2022）によれば、日本の女子の理系選択者が少ない要因は、女子の理数系科目の学力不足ではなく、外的要因によるものであるという。例えば、教師や塾講師から「女子は無理しなくてもいい」「数学はセンスがなければ難しい」といったネガティブな発言の影響を受けたり、仲が良い友人のほとんどが文系を選択することによって影響を受けたりするなどして、「女子は文系」というステレオタイプが形成されているという。

また、身近に理系進学を経て活躍している女性が少ないことも、ステレオタイプの形成を助長する外的要因の一つとして考えられる。2019 年に実施された学校教員統計調査をみると、中学校と高等学校では、国語や英語の女性教員は比較的多いが、数学や理科では男性教員が多くなっている（文部科学省 2021）。つまり、学校生活のなかで、理数系科目の女性教員に出会う機会が少ないこと

^{*1} 岐阜大学教育学部

が、女子は文系、男子は理系という見方に影響を及ぼしている可能性がある。同様に、内閣府から委託を受けた株式会社リベルタス・コンサルティングが実施した「女子生徒等の理工系進路選択支援に向けた生徒等の意識に関する調査研究」（2017）によると、中学2年生の女子生徒を対象とした調査で、「自身は理系か文系か」という問いに対して「理系タイプである」・「どちらかといえば理系タイプである」と回答した理系意識の強い割合は、中学校で数学・理科のどちらも男性教員から教わっている女子は22.5%であるのに対して、どちらか1科目を女性教員から教わっている女子は33.8%であった。こうした調査結果からは、身近な理系女子の活躍が模範となる反面、その模範となる存在が少ないことで女子の理系選択が積極的にはならないことが窺える。

以上のことから、文理選択や進路選択の背景には、教科の得意・不得意という個人の学力状況を超えて、文系・理系に対する社会のステレオタイプな性別観や、将来の模範となる存在の有無が関係している。特に女子においては、理系科目に対する苦手意識や学力にかかわらず、消極的な理由から理系ではなく文系を選択する者が多く存在していると推察される。そこで本研究では、女子の進路決定の状況やその要因を先行研究等によって検討したうえで、高等学校における文理選択や進路指導の実態を明らかにし、女子が積極的に自己実現を果たすための教育のあり方について考察する。

2. 高等学校卒業後の進路状況

ここでは、高等学校卒業後の進路状況について確認しよう。文部科学省の学校基本調査（2023）によれば、全国の高校生のうち、就職は14.1%、大学・短期大学への進学は60.9%、専修学校への進学は21.9%である。大学・短期大学への進学のうち、大学進学は57.7%、短期大学への進学は3.4%である。大学・短期大学を合わせた進学率は男女ともに5割を超えており、専修学校の進学率は女子で3割、男子で2割となっている。以下では、7割以上の高校生が卒業後に進学する専修学校、短期大学および大学への進学状況について、文部科学省の学校基本調査などをもとに、それぞれ詳しく検討する。

まず専修学校について、文部科学省の学校基本調査

（2023）では2023年度の専修学校専門課程の入学者数および男女の人数を分野別に公表している。このうち入学者数が比較的多い主要な分野をみると、とくに女子比率が高いのは、「歯科衛生」（99.4%）、「看護」（85.4%）、「美容」（79.7%）などの分野である。一方でとくに男子比率が高いのは、「自動車整備」（96.5%）、「情報処理」（82.5%）、「法律行政」（71.9%）などの分野である。このように専修学校においては、かなり明確に男女比に違いがみられる分野がいくつか存在しており、それがそのまま職業における男女比にもつながっていることが示唆される。

次に短期大学について、こちらも文部科学省の学校基本調査（2023）では、2023年度の短期大学の入学者数および男女の人数を分野別に公表している。これをみると、全体的に女子比率が高くなっているが、「教養」（98.5%）、「教育」（94.8%）、「家政」（93.1%）などは顕著に女子比率が高い。一方で男子比率が高いのは、「工業」（84.2%）のみである。短期大学への女性の進学率は、1993年度の24.9%から減少傾向にあり、2023年度には6.1%になっている。短期大学や女子大学への進学減少の理由について芝山（1999）は、女性の社会進出が進み、女子の大学進学率が高まると同時に、「四年制志向や共学志向」が強まり、短期大学自体が不人気であることと、そのような動きのなかで、大学の設置自体も短期大学から4年制大学に移行していることを挙げている。このように減少しつつある短期大学のなかでも、女子の進学先の多くは、教養的な学問分野、教育学（主に幼稚園教育）、家政学といった偏りがあることがわかる。

最後に大学について、同じく文部科学省の学校基本調査（2023）では、2023年度の大学の入学者数および男女の人数を分野別に公表している。大区分の分野でみると、女子比率が高いのは、「家政」（89.8%）、「芸術」（69.5%）、「保健」（66.5%）、「人文科学」（63.7%）などである。小区分の分野でみると、「家政学」（94.3%）、「児童学」（93.8%）、「看護学」（90.1%）、「食物学」（88.5%）、「被服学」（87.1%）などの女子比率が顕著に高くなっている。一方で男子比率が高い大区分の分野は、「商船」（86.0%）、「工学」（82.7%）、「理学」（70.7%）である。小区分の分野でみると、「原子力工学」（95.7%）、「機械工学」（92.9%）、「電気通信工学」（89.5%）

「応用理学」(87.5%)などの男子比率が顕著に高くなっている。このように、工学や理学といった理系学部には女子が少ない傾向がある。ただし、この傾向が理系学部の全てに当てはまるわけではない。例えば「保健」のなかでも「医学」(男子 59.6%, 女子 40.4%)や「歯学」(男子 53.7%, 女子 46.3%)は男子割合がやや高いものの、「看護学」(男子 9.9%, 女子 90.1%)や「薬学」(男子 37.0%, 女子 63.0%)は女子割合が高い。専修学校でも「看護」分野に進学する女子学生の割合が高かったことと同様、大学でも「看護学」を学ぶ女子学生の割合が高くなっている。後述するように、実際の職業をみても、薬剤師や看護師として活躍している女性は多い。

以上、男女別に高等学校卒業後の進学状況について検討したところ、女子が進学する専攻分野には偏りがあることが明らかとなった。専修学校においては、歯科衛生や看護を専攻する学生のほとんどは女性であり、これらは職業に直結しやすい分野であることから、歯科衛生士や看護師といった職業の女性比率も高くなる。短期大学の進学率は男子よりも女子の方が高く、そこでは教養や幼稚園教育や家政が多く学ばれている。とくに幼稚園教育は、先に挙げた歯科衛生や看護と同様、職業に直結しやすく、幼稚園教諭の女性比率も高い。今日最も多くの高等学校卒業生が進学する大学では、男女の進学率に大きな差はないものの、分野によって男女差が大きく存在している。女子は専修学校や短期大学と同様、家政や看護などの分野の割合が高く、男子は工学や理学といった理系分野の割合が高い。ただし、すべての理系分野で男子割合が高いというわけではなく、看護学や薬学では女子の割合が高くなっている。これも、看護師や薬剤師といった職業に直結しやすく、職業における男女比も女性が多い。これらのことから、女子はいずれの学校種に進学するにしても、家政、保健、看護、幼児教育など、比較的限定された分野を選択しており、それらは具体的な職業に直結しやすいという特徴もみられるのである。

3. 職業分野における性別の偏り

先に論じたように、看護学、薬学、幼稚園教育などの学問分野は、比較的職業と直結しやすい。看護学を専攻する学生の多くは看護師に、薬学を専攻する学生の多くは薬

剤師に、幼稚園教育を専攻する学生の多くは幼稚園教諭に、それぞれなることを目指している。つまり、これらの学問領域に女子の偏りが見られるということは、看護師や薬剤師、幼稚園教諭という職業にも女子比率が高いという偏りが見られる可能性がある。そこで以下では、職業分野における性別の偏りを検討する。

まず看護師について、厚生労働省は「令和 4 年衛生行政報告例(就業医療関係者)の概況」において、2022 年時点の看護師割合を男女別に示している。これによると、男性看護師は 8.6%であり、女性看護師は 91.4%である。男性看護師の比率は近年では上昇傾向にあるものの、依然として女性看護師が多数を占めている(厚生労働省 2023)。貝沼ら(2008)によれば、女性患者やその親族からは看護師が担う業務内容によって男性看護師を敬遠したいという願望が多く見受けられることや、難しい患者への対応を任せられる男性看護師は配属される病棟に偏りがあるといい、女性に比べて男性の看護師が活躍できる場面は限られているだろう。このように、男性看護師に出会う機会が多くないことで、「看護師＝女性」のイメージが形成・定着しているのではないだろうか。

次に薬剤師について、厚生労働省は「令和 2 (2020) 年医師・歯科医師・薬剤師統計の概況」において、2020 年時点での薬剤師数を男女別に示している。これによると、男性薬剤師は 38.6%であり、女性薬剤師は 61.4%である(厚生労働省 2022)。このように女性薬剤師の割合が高い理由について株式会社マイナビは、薬剤師の就業時間が規則的で家庭と両立しやすいこと、産後・育休後の職場復帰がしやすいこと、という 2 つの理由を挙げている(株式会社マイナビ HP)。また山本・内山(2002)は、20 代後半の女性で、出産や育児のために病院・診療所や医薬品関連企業から転職する人数は増加傾向にあり、医薬分野の進展に伴って薬剤師を置く薬局の数が全国的に増加したことから、薬局へ再就職したり新卒で薬局薬剤師になったりする女性が増加していると述べている。近年増加傾向にある薬局勤務では、勤務時間に融通が利く雇用形態を実現することができ、かつ資格が必要なため一般的なパートタイム労働と比べると時給が高くなっていることから、とりわけ女性が選択しやすい仕事となっているのだろう。女性にとって働きやすい環境であることから、薬剤師の女性割合が高くなり、女性が就く仕事という

イメージも広がっている。

さらに幼稚園教諭について、文部科学省（2023）の学校基本調査では、2023 年の教員数（本務者）が示されている。これによると、男性教員は 6.6%であり、女性教員は 93.4%である（文部科学省 2023）。また保育士について、独立行政法人福祉医療機構は 2018 年に全国の保育施設を対象に「保育人材」に関するアンケート調査を実施し、職員の性別構成割合を示している。これによると、保育所または認定こども園で保育業務に直接に携わる職員（保育士・保育教諭・保育補助者等）は、男性職員が 4.0%であり、女性職員が 95.8%である（独立行政法人福祉医療機構 2019）。これらのデータをみると、幼稚園教諭や保育士は明らかに女性が多い。齋藤・平田（2008）は男性が少ない要因について、①給与水準が高くないという経済的な問題、②女性職員に囲まれた職場環境で男性職員は本領を発揮することが難しいという人間関係の問題、③幼稚園・保育所は「家庭代わり」であり保育者は「母親代わり」であるという保育観が根付き「保育者＝女性の仕事」というイメージが固定、という 3 点を挙げている。

加えて前節では、家政学を専攻する学生の女子比率が顕著に高いことを明らかにしており、家政学の関連学部・学科卒業者が就く職業の男女比にも偏りがあると考えられる。家政学には、家政分野、被服分野、食物分野、居住分野、児童教育分野があり、これらの分野の先にはどのような職業があるのだろうか。例えば、東京家政大学は HP 上で卒業生の進路を公開しており、児童学科の卒業生は保育士・幼稚園教諭・特別支援学校教諭など、栄養学科の卒業生は栄養士・中学校家庭科教諭・フードプランナーなど、被服美術学科の卒業生はスタイリスト・アパレル製造販売・ショップディレクターなど、環境教育学科の卒業生は公害防止管理者・環境プランナーなどが進路として示されている（東京家政大学 HP）。これらの職業の就業者には性別の偏りが比較的大きく、女性の割合が高い傾向の職業もある。例えば、アパレル・ファッション業界の従業員の男女比を見ると、男性は約 25%、女性は約 75%である（一般社団法人日本アパレル・ファッション産業協会 HP）。野崎（2010）によれば、戦後の高度経済成長期には女性は家庭に入り、外で働く男性を支えることが重要であるという風潮があったため、家庭科は女子必修の良妻賢母教育であると考えられており、バブル景気崩壊後

によりやく家庭科が男女共修になったという。ただし、依然として「家庭科は女子の方が得意」や「家政学部は女子学部」などのイメージが残っているのではないだろうか。

衣・食・住などの日常生活、看護や介護、乳幼児の保育や教育などは、家政学や看護学や教育学といった学問分野とも密接につながる職業である。このような職業は一般的に女性の就業者割合が高く、「女性の仕事」というイメージが形成されることで、それにつながる学問分野への進路選択にも影響を与えていることが予想される。

4. ジェンダー・ステレオタイプと女子の進路選択

上述のように、衣・食・住などの日常生活、看護や介護、乳幼児の保育や教育などは、「女性の仕事」というステレオタイプの性別役割として認識されやすい。ここでは、ジェンダー・ステレオタイプの具体について検討する。

ステレオタイプとは、「任意の社会集団の成員がもつ特徴（性格特性、能力、身体的特徴等）について過度に一般化された知識」（野寺・唐沢 2004, p.9）のことを指す。なかでもジェンダー・ステレオタイプは、他のステレオタイプと異なる特徴があり、規範的な側面が強いとされている。ジェンダー・ステレオタイプを検討する視点として沼崎ら（2006）は、男性や女性が従うように期待される属性や役割といった「規範的ステレオタイプ」と、男性や女性を特徴づける属性や役割といった「記述的ステレオタイプ」があると指摘している。以下ではこの 2 つの視点を中心に、ジェンダー・ステレオタイプの特徴について確認する。

「規範的ステレオタイプ」では「男らしさ」「女らしさ」などと表現され、求められている振る舞いや性役割を示すものがある。高井・岡野（2009）が大学生から 60 代の男女を対象に実施した調査によれば、「男らしさ」としては、包容力、決断力、行動力、リーダーシップなどの特徴が挙げられており、他方で「女らしさ」としては、気遣い、家庭的、愛嬌などの特徴が挙げられている。また伊藤（2001）は、ジェンダー・ステレオタイプの構造を明らかにするため、20 歳以上 60 歳未満の男女を対象に調査を行った結果、男性に対しては、緊急事態や危機的状況において事態を切り抜ける判断力と行動力の「頼もしさ」において肯定的な構造があり、女性に対しては、共感性や献

身性が要求されるケア役割を中心とした母親役割において肯定的な構造があることを明らかにしている。さらに伊藤の同研究では、男性の「頼もしさ」や女性の「母性」は身体機能に根ざしたものと考えられてきたことや、性差を意識する状況では自らの性に期待されている特性をステレオタイプ化して認識する傾向にあることなども指摘している（伊藤 2001）。したがって「男性／女性はこうあるべきだ」という「規範的ステレオタイプ」は、男女の身体機能の違いに基づいて伝統的な価値観として形成されてきたものであることに加え、自分自身に規範を課している場合が多いことから、それを逸脱しないように両性がそれぞれの役割を演じることで、ジェンダー・ステレオタイプは変化しづらいと考えられる。

ジェンダー・ステレオタイプにおける「記述的ステレオタイプ」には、例えば、「男性は知的・論理的である」「女性は感情的である」や、「男子は理系、女子は文系」「女性は数学が苦手である」などがある。これらの「記述的ステレオタイプ」は、集団成員がもつと想定される特性を示しており（野寺ら 2007）、日常生活のなかで得られる単純な情報を構造化する機能があるという（倉矢 2016）。つまり「記述的ステレオタイプ」は、一般化されやすく、情報として認識できるほど現実の事象と近いものであるといえるだろう。実際に、先に述べてきたように女子の理系選択者は少なく、「男子は理系、女子は文系」という傾向はある。また、「女子は数学が苦手」というジェンダー・ステレオタイプについては、2018年にOECD（経済協力開発機構）が義務教育終了段階の15歳児を対象にPISA（学習到達度調査）を行った結果、日本の数学的リテラシーの点数は、男子が女子よりも10点高く統計的な有意差があることが明らかになっている（国立教育政策研究所 2019）。日本以外の参加国をみても、2012年のPISAでは、数学的リテラシーの点数が男子よりも女子の方が高いのは、41か国の中で5か国だけであった（国立教育政策研究所 2012）。日本を含む多くの国で、数学の学力は女子よりも男子の方が高い傾向にあるといえる。

ただし、女性の理系選択者が少ない原因は、単に理数科目の学力が男子に比べて低いだけではない。例えば学校環境に着目すると、教室内に存在するジェンダー・ステレオタイプが、学習者に浸透してしまう可能性もある。稲田（2012・2021）は、教師を対象に実施した調査によって、

大多数の教師が「理科＝男性」という無自覚だった自身のステレオタイプを認める結果を示している。高見・尾澤（2022）は、意識的か否かに関わらず、「女子は数学が苦手」「女子なのにすごい」という教師が示す反応や授業中の言動が、女子学生の数学に対する意欲と成績に影響を及ぼすとしている。さらに古田（2016）は、教師生徒関係だけではなく、生徒同士の相互作用のなかで形成されるジェンダー・ステレオタイプについても述べている。女性の自己概念は周囲の環境によって変化しやすく、例えば、男女同数の学校においては理数系科目に対する女子の苦手意識が強い傾向が示されている（古田 2016）。これらのことから、女子は自らの得意・不得意を判断する際に他者の影響を受けやすく、とりわけ理数科目については男性よりも苦手意識を持ちやすいといえよう。

こうした学校環境に加え、家庭環境もまた女子の理系選択に対してネガティブな影響をもちうる。河野（2019）は、一般的な家庭が女子の理系選択を推進しづらい原因として、教育費を抑制する傾向にあることや、母親の影響を指摘している。教育費の抑制については、両親が娘に対して自宅から通学できる大学を望む場合や、私立大学の理系学部に進学して多大な費用をかけることを忌避する場合があるという（河野 2019）。母親の影響については、理系の専攻や職業であった中高生の母親は少ないため、「女性は理系が向いている」と考える母親が少なく、娘にとって理系女性のロールモデルに母親になることはほとんどないという（河野 2019）。

4年制大学への進学率は男女ともに増加しているものの、学部・学科を選択する際の性差は依然として大きく、理学部や工学部へ進学する女子は極端に少ないままである。これには、単に理数科目の学力が男子に比べて低いだけではなく、学校環境や家庭環境による影響も考えられ、女子の理系選択が推進されない状況が続いている。このようなジェンダー・ステレオタイプが定着しているなか、女子の進路選択の幅を広げ、積極的に理系選択ができるようになるためには、学校教育においてどのような指導が求められるだろうか。

5. インタビュー調査の概要

これまで論じてきたように、今日では男女共同参画社

会の実現を謳いつつも、依然として女子の進路選択には目に見えない様々な制限があり、学部や職業などの偏りも大きいままである。女子がジェンダー・ステレオタイプに捉われず積極的に自分のキャリアについて考えた上で、文理選択や大学・学部選択をするためには、学校教育において教師はどのような働きかけをすればよいのだろうか。そこで本研究では、高等学校における文理選択や進路選択に関する指導の実態を明らかにするため、現職の高等学校教諭を対象としたインタビュー調査を実施する。調査から得られた知見をもとに、女子が積極的に自己実現を果たすための教育のあり方について考察する。

調査では、①高校生の男女別文理選択の実態、②文理選択に関わる教師の指導、③文理選択と進路選択で共通する指導、④学校・学年での進路指導の取り組み、⑤理想の進路指導の5つの枠組みに沿って質問内容を決定した。

1つ目の枠組みは、高校生の文理選択の男女別の傾向や選択の主な理由を尋ね、実態を明らかにするために設定した。2つ目の枠組みは、文理選択の実態を踏まえながら具体的にどのような指導をしているのかを尋ねるために設定した。3つ目の枠組みは、1年次の文理選択が2年次以降の進路選択に及ぼす影響と、文理選択と進路選択の指導の際に共通して意識していることを明らかにするために設定した。4つ目の枠組みは、学校全体や学年全体ではどのような進路指導の取り組みがあるか、またそれらが生徒に与える効果や課題を尋ねるために設定した。5つ目の枠組みは、理想の進路指導とはどのようなものだと考えられるか、教師の目線から検討するために設定した。インタビュー調査は半構造化形式で、これらの質問を基本に実施した。

インタビュー調査の対象者として、A教諭に協力を依頼した。A教諭は、調査時点において勤務年数8年目の国語科の高校教諭である。初任から2校目で、本年度から2年生の学年主任を務めている。A教諭が現在勤務するB県内のX高等学校は、1学年230人ほどの総合学科の高等学校であり、就職が毎年30人ほど、専門学校への進学者が毎年100人ほど、大学進学者が毎年100人ほどの多様な進路がある進路多様校である。さらに調査では、A教諭が現在勤務しているX高等学校に加え、初任の1校目に勤務した進学校であるY高等学校の進路指導についても聞き取ることができた。A教諭の1校目の勤務校

であるY高等学校は、X高等学校と同じB県内に位置し、320人ほどの普通科であり、国公立大学合格者を毎年180人ほど輩出する中堅進学校である。

A教諭にはあらかじめ調査の承諾を得て、依頼書を事前にメールで送付した。インタビュー調査は、2023年11月3日（金）に14時から1時間半ほど行った。調査に先立ち、依頼書と同意書を口頭で読み上げ、調査への協力を承諾してもらったうえで同意書にサインをしてもらった。調査方法は、尋ねたい内容を当日書面で手渡しし、その書面に沿って半構造化形式でインタビューを行い、A教諭から許可を得たうえでインタビューの内容を音声レコーダーとノートに記録した。

6. インタビュー結果の分析

ここではA教諭へのインタビュー調査のデータをもとに、(1)高校生の文理選択の実態と文理選択に関わる教師の指導について（上記質問枠組みの①②）、(2)文理選択と進路選択の指導において共通して意識していることについて（上記質問枠組みの③）、(3)進路指導に関わる学校全体・学年全体の取り組みに対する効果や課題について（上記質問枠組みの④）、(4)A教諭が考える理想の進路指導について（上記質問枠組みの⑤）、のそれぞれを分析する。なお、インタビュー調査で得られたデータはゴシック体で表記し、カッコ内の文言は筆者によって加えたものである。

(1) 文理選択の実態と教師の指導

ここでは、A教諭のインタビューをもとに、文理選択の実態と教師の指導について検討する。はじめに、高校生の文理選択の傾向に男女の違いがあるのかなどの実態を明らかにするため、X高等学校の生徒の文理選択や進路選択の概況について尋ねた。

この学校みたいな総合学科の高校は、大学生が履修登録するみたいに進路に応じて個人で履修科目を選ぶようになっているから明確に文理選択を行っていないんだけど、現状としては就職も専門学校も大学進学もいる状態かな。（中略）この高校自体の生徒の男女比が3：7で女子の方が多から、大学進学のなかでも文系進学がほとんど。看護を除いた理系進学はごく数人で、3～4人とかじゃないかな、本当に少ない。

短期大学だと保育がほとんどだね。

このように X 高等学校のような総合学科の高等学校は、文系・理系の 2 つのどちらかを選択させるのではなく、就職や専門学校、短期大学や 4 年制大学など様々な選択肢のなかから、生徒一人ひとりが選んだ進路に合わせて、必要な科目を選択しているという。また、大学進学の子のうち理系は 3~4 人と少ないことについて、X 高等学校の女子生徒が多いことが原因であると A 教諭は捉えている。X 高等学校は大学進学の他にも、就職や専門学校への進学を選択する生徒もいるという。それでは、生徒はどのように履修科目を決めているのだろうか。

普通科の生徒よりも早い段階で進路を考えさせる必要がある。だって、履修登録が進路選択に直結するからね。2 年生の科目選択を 1 年生の 1 学期にするから、就職したいのなら簿記とかプログラミングを履修して、大学進学ならどの科目が試験に必要なかを考えさせるね。

このように A 教諭は、X 高等学校において 1 年生の 1 学期に行う履修登録が、進路選択に直結していると語っている。多くの進学校が文理選択を行っている 1 年生の間に、X 高等学校では、就職するのか、専門学校に行くのか、大学進学をするのかという進路選択に加えて、卒業後を見据えて履修科目を絞らなければならないという。就職を選択する場合には、磨くスキルや取得したい資格などを決め、プログラミングや簿記などの科目を履修しなければならない。大学進学を選択するなら、受験に必要な科目を履修しなければならない。進路多様校である X 高等学校の場合、単に文理選択を行うだけではなく、将来の進路を見越した履修科目選択が早期に行われており、自分自身で進路を選び抜く力がより求められるのかもしれない。

次に、履修科目を決定する生徒の主な理由について尋ねた。

普通科に進学するような子はそもそも進学することを当たり前に考えているし、工業高校や商業高校に行く子はもともと就職を考えているわけで、総合高校に行くような子は就職も進学も「うーん」って感じで、中学生の間にはまだふわふわとして決められなかった子が多く通っているから、「これがしたい」と思っている子は集まりづらいね。だから基本はその時の興味・関心で選ぶ子が多い。

進路多様校である X 高等学校の生徒は、普通科の高等学校に入学して大学進学を目指したり、工業高校や商業高校に入学して専門性を身につけて就職を目指したりする生徒とは異なり、中学生のあいだに就職と大学進学のどちらも選ぶことができなかった生徒もいるため、「これがしたい」という思いを持っていることが少ないと A 教諭は認識している。したがって、高等学校入学後の履修科目選択時に抱えている興味・関心に基づいて、科目選択を行っている生徒が多いという。1 年生の 1 学期に行われる履修科目選択は進路選択でもあるため、本来ならば卒業後の進路を考慮して判断しなければならないのにもかかわらず、1 年生 1 学期時点の興味・関心によって履修科目が決められているという実態がある。

それでは、大学進学を目指す生徒の文理選択の指導はどのように行っているのだろうか。A 教諭が現在勤務している X 高等学校だけではなく、以前に勤務していた Y 高等学校での指導経験も踏まえて、生徒の文理選択の実態について質問した。

(生徒は教科の苦手意識で文理選択を行っているのかという質問に対して) そうだね。一応それだけで選ぶとは言ってるけどね。本当にやりたいことがあるならせめて苦手じゃなくなるまでやれって言うね。それでも実態として、数学がどうしても苦手な子は基本理系選ばないよね。だって、嫌いなんだから。

このように A 教諭は、実際には多くの生徒が自分の教科の苦手意識に基づいて文理選択をする傾向があるが、苦手意識だけで文理選択をさせないことを心がけているという。また、「数学がどうしても苦手」と思っている生徒が理系を選ぶことは基本的にないと語っている。数学が苦手な嫌いな生徒が、文系の学部よりも数学の配点が高い理系の学部の試験を受けるために、数学を勉強し続けることは骨が折れることだろう。したがって、文理選択の時に苦手な教科を避けることは自然の流れなのかもしれない。このような生徒の文理選択に対して A 教諭は、「本当にやりたいことがあるならせめて苦手じゃなくなるまでやれ」と語っていることから、文理選択時の教科の苦手意識によって将来のやりたいことを諦めさせないように、学力を上げるように伝えていることがわかる。

また A 教諭は、文理選択に悩む生徒に対する指導を次

のように述べている。

文理選択に悩む生徒には、ものを作る方が好きなのか、人を対象にしたいのかを問いかけるね。物理的对象か社会的対象のどっちに興味が強いかってこととかね。人と関わって活躍したいならやっぱり文系を勧めているね。

A 教諭は、「ものを作る方が好きなのか、人を対象にしたいのか」や、「物理的对象か社会的対象」というような、理系と文系の特徴を示す指導を行っている。具体的にどのようなことをしたいか思い浮かばない生徒がいたり、高校の学びでは学問や研究の知識が限定的になりがちだったりすることから、大まかな学問の分類である文系・理系のそれぞれの特徴をわかりやすく伝えることは、文理選択のための足掛かりとなるだろう。

以上のことから、X 高等学校のような進路多様校においても、Y 高等学校のような中堅進学校においても、1 年生という早い段階で文理選択を迫られるという現実がある。しかし、早い時期の進路選択では、積極的に進路を選ぶことができる判断材料が少なく、やりたいことや将来の夢に基づいた選択は容易ではない。したがって、大学進学を目指す生徒にとって、教科の苦手意識があるかどうかや文理選択の判断材料になりやすいのだろう。ただし A 教諭は、「ものを作る方が好きなのか、人を対象にしたいのか」を問うなど、単に教科の得意・不得意という選択だけではなく、やりたいことや将来の職業や見越した選択ができるような指導を行っていることも特徴的である。

(2) 文理選択と進路選択で共通する指導

ここでは、A 教諭が文理選択と進路選択のどちらの指導にも共通して意識していることについて分析する。まず、文理選択の実態として女子の多くが文系を選択することを、A 教諭はどのように捉えているのだろうか。

女子が文系選択するときには、学級とか進学した後の学部とかに男子ばかりなのが嫌ですみたいな子ももちろんいるね。何がやりたいかだけで選ぶわけじゃなくて、環境も同じくらい大事だからね。

A 教諭は、女子が文系選択をしやすい原因の一つに、男子ばかりの環境があると語っている。Y 高等学校を含む一般的な進学校は、1 年生で文理選択を行い、2 年生以降の 2 年間は文系と理系は分けてクラスが編成される。し

たがって、文理選択は 2 年生以降の学習環境に大きく関わるため、女子が少ない環境で過ごすことに抵抗がある女子は理系を選びにくくなるだろう。A 教諭が「何がやりたいかだけで選ぶわけじゃなくて、環境も同じくらい大事だからね」と語っているように、やりたいことがあったとしても、男子が多い理系分野を女子が選択しづらいことで、理系分野は男子の割合が高い状態が維持され、その結果として女子が理系を選択しづらい環境が続く。

さらに、進学校である Y 高等学校について、なぜ女子は文系選択者が多いのかを詳しく語っている。

女子で理系進学をして男子同等かそれ以上に活躍しようと思うと、相応のレベルの高い大学に行かないといけないという認識があるから、向学心が強い子じゃないと選びにくいんだと思うね。男子は部活引退してからすごい勢いで伸びるっていうから、それに負けないくらいもともと数学・理科が得意で、勉強し続ける根性のある女子じゃないと理系はきついっていう教員の共通認識があったから、女子の理系選択にはシビアだね。

このように A 教諭は、理系には文系よりも学力が必要であり、伸びしろのある男子に比べると女子は基礎学力がより求められると考えている。また、女子が理系選択するには、もともと数学や理科が得意であることや、勉強し続ける根性や向学心がなければならないという考えは、Y 高等学校に勤務していた教師の共通認識であったという。加えて A 教諭は、「女性で理系進学をして男子同等かそれ以上に活躍しようと思うと、相応のレベルの高い大学に行かないといけない」と語っている。このように、女子が理系分野で男子と同等以上に活躍するためには、偏差値の高い大学で研究をしなければならず、男性優位の領域で女子が活躍する困難さが示されている。

次に、進路指導と文理選択の指導の際に共通してどのようなことを意識しているのかについて、A 教諭に尋ねた。

文理選択を含む進路指導全てにおいて意識していることは、人任せにさせないこと。あとは、色々な人から話を聞くこと。自分の親だけ、担任の先生だけから聞いて、「だってそう言っていたから」って決めるな、と伝えている。参考することはあっても、最後は自分の意思で決めなさいと言うし、先入観だけで決めずに自分でよく調べなさいとも言ってるね。

このように、A 教諭が文理選択を含む進路指導において大切にしていることは、生徒の性別を問わず自分の意思で決断をさせることであり、保護者や教師が言ったことを鵜呑みにして、判断を人任せにさせないことである。そのために、色々な人から話を聞くように伝えたり、先入観に左右されずに自分で調べさせるように指導したりしているという。

以上のことから A 教諭は、全ての生徒の進路選択において、自分の意思で決断することを大切にしていることがわかった。しかし他方で、理系という男子ばかりの環境を避ける女子が一定数いたり、女子の理系選択には男子以上に学力が重視されたりするなど、女子は男子よりも環境や学力によって進路が制限されやすいと教師には認識されている。

(3) 学校・学年での進路指導の取り組み

ここでは、X 高等学校が行っている特徴的な進路指導について、A 教諭がどのような効果や課題があると考えているのかを分析する。はじめに、X 高等学校において学校全体・学年全体で行う進路指導の特徴について尋ねた。

進学の子達には、（中略）楽をせずに最大値を発揮して進路選択をしなさいと指導している。まずは学力をつけた上で、選びなさいと言う。進学校なら、大学に行きたい子が多いから雰囲気として自然に勉強を頑張れるし、その空気に染まってくよ。だけど、総合学科の高校なら、進学したい子には学校外の模試を受けさせて自分の現状を把握させることが必要だね。学校内では成績がいいことで、鼻を高くしないように。（中略）だから X 高等学校では積極的に外部模試受けさせるし、この時期の受験生はこんなことしますよ、このくらい勉強してますよって刺激を与える。（中略）今は学年主任やってるけど、学年集会の時は進路別に生徒を集めさせてる。就職の子はこの話聞きなさい、進学の子は大学の話聞きなさいってね。

このように A 教諭は、進学校でも進路多様校でも共通して、大学進学を目指す生徒には学力をつけて進路選択をするように指導を行っているという。一方で、大学進学を目指す生徒にとって進路多様校と進学校で異なるところは、学校の雰囲気であるといえる。進学校である Y 高等学校では、A 教諭が語っているように、生徒のうち大

学進学者がほとんどであり、学校全体で受験勉強を頑張る雰囲気があるため、自然と勉強に力を入れることができるだろう。反対に X 高等学校のような進路多様校では、大学進学希望の生徒は、学校内での成績が比較的良く、安心してしまうことがあるため、A 教諭は外部の模試を積極的に受けさせたり、一般的な受験生の姿を伝えたりする指導を行って刺激を与えている。また、X 高等学校の学年集会では、選択した進路別に生徒を集めて、それぞれに異なった話をするという。さらに X 高等学校において、大学進学以外を選択した生徒を含めて、どのような進路指導を行っているのかについて尋ねた。

キャリア教育ということで本校では、就職の子・進学の子関係なく、この市のなかにある企業に職場見学に行くなどして職業観を学んだりしていくなかで、何がしたいのかを考えさせている。

このように、X 高等学校は生徒の進路に関係なくキャリア教育の一環として職場見学を位置づけており、全ての生徒に職業観を学ばせることで、特にやりたいことがなく総合学科の X 高等学校に入学した生徒にとって、自分のやりたいことを見つけられるきっかけになるかもしれない。しかし、高校生の実態を考えると、将来の夢を明確に持っている生徒は多いとはいえない。したがって、将来就きたい職業に関連づけて進路を選択することは大切ではあるものの、実際には難しいのではないだろうか。

A 教諭は、卒業後の職業に関連させて進路選択をするについて、次のように語る。

教師のなかでも年々、将来の仕事と関連させて選択させようという動きが強くなっている。大学進学率が上がって、就職に有利とか関係なく、「やりたいことがあるから大学進学します」なんて子が今はほとんどいない。例えば、本当は文学に興味があるけど就職先が思い浮かばないから、経営とか経済学びますなんて子も多いね。生徒の親が自分の子どもが受ける大学の就職先を気にして子どもに先回りしてそれを伝えるケースなんかもある。そういう風に親の考えに影響を受けて、進路選択をしちゃう子が年々多くなっているようにも感じる。それこそ、女の子なんだから遠くに行くとか、浪人するとか言われてしまったら、本人に明確にこうしたいって意思がない女子はそうだよなって受け入れてる現状がある。でもこれからは、男女共働きが家庭がほとんどになってくるんだろうと思う。今の高校生の両親の世代から見ると、自分

たちが学生の頃以上に、女性も働くことが当たり前になっているから親達も困ってる。子どもの進路に「こうした方がいい」って助言しにくくなって困惑してるんじゃないかな。

このように A 教諭は、やりたいことや将来の夢を大学進学理由にする子どもがほとんどいないからこそ、教師は年々、将来の仕事と関連させて生徒に進路指導をするようになってきていると語っている。今日の大学進学率は男女ともに 50%を超えて一般的になってきていることから、就職活動のスタートラインに立つために大学進学が不可欠な条件になりつつある。だからこそ、やりたいことや将来の夢と関連させた進路指導が一層重視されているのだろう。しかし、就職先が思い浮かぶ「経営とか経済」などの学部と、そうではない「文学」などの学部があり、卒業後の就職を見据えた大学選びをしてしまう場合には、後者のような学部を避けることがあるという。ここから、やりたいことや興味に基づいた進路選択の難しさがわかる。また A 教諭は、生徒の選択は保護者の考えに影響を受けている場合があり、そのような生徒が年々増えていると感じている。とりわけ女子は、実家から離れた大学を受験することや浪人することに対して批判的な保護者の考えを、そのまま受け入れているケースがあると A 教諭は認識している。しかし近年では、共働き世帯や正規雇用の女性労働者は増加傾向にあり、保護者自身の学生時代の社会情勢と異なっている点が多いことから、自分の娘に「こうした方がいい」と助言がしづらくなっているのではないかと A 教諭は考えている。

以上のことから A 教諭は、将来の仕事と関連付けた進路選択を重視していることがわかった。しかし、やりたい仕事明確にある生徒はごく一部であり、大学進学率が高い今、学問への興味や意欲が大学進学動機になることは少ないため、就職に有利・不利を考えた大学・学部選択をする生徒も一定数はいると A 教諭は捉えている。また、自分の子どもの卒業後の生活や仕事を考えて、保護者が介入する場合があります。特に女子は保護者の進路に対する考えの影響を受けやすいともしている。

(4) A 教諭が考える理想の進路指導

最後に、A 教諭が考えている理想の進路指導について検討する。まず、女子の進路選択の幅が男子よりも狭いことについて A 教諭に尋ねた。

家庭や金銭的な問題やで、進路を制限されることはやっぱり女子の方が多いと思う。奨学金を借りたとしても、それを問題なく返していけるっていう保証がないから。女性の方が、出産や育児、介護とかで働けなくて収入が絶たれることが多いはずだし、結婚や出産や車、家のローンも抱えることになったら奨学金なんて返していられないよね。（中略）女性が子どもを産むし、女性が授乳するわけだから、いくら男性の育児休暇の取得推進があったとしても、女性が休業・離職するのが普通だよ。男性がどんなに育児に意欲的だったって、授乳はできないんだから。女子が奨学金借りてまで、浪人してまで、実家から離れてまで大学行くことに意味があるのかって考えると、（中略）男よりもハードルがグンと高いと思う。

A 教諭は、女性の方が出産や育児に伴って休業・離職することが一般的には男性よりも多いため、女性の大学進学に関して制限を受けやすく、奨学金を借りること、浪人すること、実家から離れた大学に通うことは、男性よりもハードルが高いと捉えている。今日、正規雇用の女性労働者の増加や共働き世帯の増加に付随して、様々な企業で男性の育児休暇の取得を促進する動きが見られたり、家事や育児に意欲的な男性が増えたりと、伝統的な「男は仕事、女は家庭」などの家庭性別役割分業が薄れつつある。しかし、A 教諭が「男性の育児休暇の取得推進があったとしても、女性が休業・離職するのが普通」と語っているように、多くの家庭において育児・家事の負担が大きいのは女性だろう。

A 教諭は、女子の進路や労働が、出産や育児などのライフイベントの影響や制限を受けやすいと認識している。これを踏まえ、A 教諭に理想の進路指導について尋ねた。

理想の進路指導も理想の進路選択もなんてものは存在しないと思っている。その生徒にとって本当に良い指導ができたのかどうかは検証できないものだしね。（中略）だから教師という立場からは「今のあなたにはこういう側面や特性があるよ、こういう長所があるよ」ってくらいしか言えない。それを伝えた上で、何が好きか何がしたいか何ができるかを問いかけていく。体育祭とか部活とかいろんな社会や他人との関わりのなかで、自分の立ち位置を理解したり、自分を客観視したりできるような、そんな自分という存在を知れるような教育ができればいいと思う。（中略）自分の好きなこと、できること、やりたいことを頑張っていく中で、結果としてそれが社会に還元できるのが良いよね。

A 教諭は、理想の進路指導も理想の進路選択も存在しないが、生徒に特性や長所を伝えて、それらを自覚させた上で、「自分という存在」を知ることができるような教育がしたいという。そして、「好きなこと、できること、やりたいこと」を頑張っていく延長として、将来の自分のあり方や社会への還元へとつなげていることが意識されている。こうした生徒の自己認識や主体性に働きかけるような指導は、性別を問わず A 教諭が重視していることである。しかしながら、これまで示してきたように進路には明らかな男女差があり、A 教諭は女子において、理系選択の難しさや進学上の制限などがあるとも考えている。すなわち、高等学校における女子に対する進路指導は、教師が目指す理想と社会状況との葛藤のなかで行われているものであり、女子の進路選択の幅を広げるには、教師はより意識的に、生徒の自己認識や主体性に働きかけるような指導を展開する必要があるだろう。

7. 考察

女子の理系選択が少ない背景には、単に理数科目の学力の問題だけではなく、学校環境や家庭環境などで長期にわたって染みついたジェンダー・ステレオタイプがあり、それによって女子の行動や関心・意欲が抑制されている可能性が考えられる。さらに A 教諭のインタビューから、出産や育児などのライフイベントの影響を受けやすい女子の進学には、男性優位の理系領域で活躍するために男子よりも向学心と学力が求められることや、浪人すること、奨学金を借りること、実家から離れた大学に通うことを回避する保護者の意識が存在することも示唆された。こうした社会状況と葛藤しながらも、A 教諭が重視するように、生徒の自己認識や主体性に働きかけるような進路指導を展開することこそ、女子が積極的に自己実現を果たすための教育として欠かせないことである。

また、女子の理系選択についていえば、就職先が看護師や薬剤師といった特定の職業分野に偏っていることや、ロールモデルとなる存在が少ないことが先行研究でも指摘されていたことから、理系分野で活躍する「自分」というイメージを幅広く形成することが重要だろう。本稿冒頭の「理工チャレンジ(リコチャレ)」事業もその一環であろうが、国立研究開発法人科学技術振興機構も次世代

人材育成事業の一環として「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」を 2009 年度から実施しており、大学や高等専門学校などの機関を継続的に支援している(国立研究開発法人科学技術振興機構 HP)。この支援を受けた岐阜大学では、2023 年度に「ぎふ理系女子はばたき応援プロジェクト」を立ち上げ、中学生や高校生を対象とした大学見学会や研究施設見学会などを実施し、理系の魅力を伝えている(岐阜大学男女共同参画推進室 HP)。中学生や高校生の段階で理系分野やロールモデルと出会う機会を創出し、同時に自己意識や主体性に働きかける進路指導を行うことで、相乗的に女子の理系選択を後押しできるのではないだろうか。

引用・参考文献

- 独立行政法人福祉医療機構(2019)「平成 30 年度『保育人材』に関するアンケート調査の結果について」(https://www.wam.go.jp/hp/wp-content/uploads/190107_No007.pdf, 2023.12.11 閲覧)
- 古田和久(2016)「学業的自己概念の形成におけるジェンダーと学校環境の影響」『教育学研究』第 83 巻第 1 号, pp.13-25.
- 岐阜大学男女共同参画推進室 HP「ぎふ理系女子はばたき応援プロジェクト」(<https://www1.gifu-u.ac.jp/~habataki/>, 2023.12.11 閲覧)
- 稲田結美(2012)「理科学習における男女差に関する小・中学校の理科主任教員の意識」『日本理科教育学会第 62 回全国大論文集』p.116.
- 稲田結美(2021)「学校理科教育におけるジェンダーの問題と課題」『学術の動向』第 26 巻第 7 号, pp.30-35.
- 一般社団法人日本アパレル・ファッション産業協会 HP「管理職への登用」(<https://www.jafic.org/gender-free/assignment.html>, 2023.12.11 閲覧)
- 伊藤裕子(2001)「性差覚醒状況におけるジェンダー・ステレオタイプ」『心理学研究』第 72 巻第 5 号, pp.443-449.
- 株式会社リベルタス・コンサルティング(2017)「女子生徒等の理工系進路選択支援に向けた生徒等の意識に関する調査研究」(https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/girls-course_h29.pdf, 2023.12.11 閲覧)
- 株式会社マイナビ HP「マイナビ薬剤師」

- (<https://pharma.mynavi.jp/knowhow/workplace/gender-ratio/>, 2023.12.11 閲覧)
- 貝沼純・斎藤美代・佐藤尚子・宍戸朋子・林正幸 (2008) 「女性看護師が男性看護師に期待する職務・役割に関する調査研究」『福島県立医科大学看護学部紀要』第 10 号, pp.23-30.
- 河野銀子 (2019) 「理系進路選択とジェンダー—日本の現状を中心として」『アジア・ジェンダー文化学研究』第 3 号, pp.5-14.
- 国立研究開発法人科学技術振興機構 HP「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」(https://www.jst.go.jp/cpse/jyoshi/tp_renew.html, 2023.12.23 閲覧)
- 国立教育政策研究所 (2013) 「生徒の学習到達度調査 (PISA) ～2012 年調査国際結果の要約～」(https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2012_result_outline.pdf, 2023.12.11 閲覧)
- 国立教育政策研究所 (2019) 「生徒の学習到達度調査 (PISA) ～2018 年調査国際結果の要約～」(https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/03_result.pdf, 2023.12.11 閲覧)
- 厚生労働省 (2022) 「令和 2 (2020) 年医師・歯科医師・薬剤師統計の概況」(https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/20/dl/R02_1gaikyo.pdf, 2023.12.11 閲覧)
- 厚生労働省 (2023) 「令和 4 年衛生行政報告例 (就業医療関係者) の概況」(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/22/>, 2023.12.22 閲覧)
- 文部科学省 (2023) 「学校基本調査 令和 5 年度」(<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528>, 2023.12.23 閲覧)
- 文部科学省 (2021) 「学校教員統計調査 令和元年度」(<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400003&tstat=000001016172>, 2023.12.11 閲覧)
- 内閣府男女共同参画局 (2019) 『男女共同参画白書 令和元年版』(https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r01/zentai/index.html#honpen, 2023.12.11 閲覧)
- 内閣府男女共同参画局 HP「理工チャレンジ (リコチャレ)」(<https://www.gender.go.jp/c-challenge/index.html>, 2023.12.11 閲覧)
- 野寺綾・唐沢かおり (2004) 「性別と男女平等主義的態度がジェンダースtereotype活性に及ぼす影響」『人間環境学研究』2 巻 2 号, pp.9-14.
- 野寺綾・唐沢かおり・沼崎誠・高林久美子 (2007) 「恐怖管理理論に基づく性役割ステレオタイプ活性の促進要因の検討」『社会心理学研究』第 23 巻第 2 号, pp.195-201.
- 野崎有以 (2010) 「『生活科学』から『家政学』へ—矮小化の過程の考察」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 50 巻, pp.243-252.
- 沼崎誠・小野滋・高林久美子・石井国雄 (2006) 「Sequential priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の予備的検討」『首都大学東京 東京都立大学人文学報』第 369 号, pp.21-52.
- 齋藤正典・平田健郎 (2008) 「『保育現場における男性保育者に対する意識調査』—男性・女性保育者から見た男性保育者」『盛岡大学紀要』第 25 号, pp.67-77.
- 芝山正 (1999) 「大学・短期大学のサバイバルについて—ビジネスのための入学者対策 (1)」『名古屋女子大学紀要 (人文・社会編)』第 45 号, pp.15-26.
- 高井範子・岡野孝治 (2009) 「ジェンダー意識に関する検討—男性性・女性性を中心にして」『太成学院大学紀要』11 巻, pp.61-73.
- 高見佳代・尾澤重知 (2022) 「女子学生の文理選択の決断にステレオタイプが及ぼした影響に関する質的研究」『日本教育工学会論文誌』Vol.46, No.2, pp.255-273.
- 東京家政大学 HP「卒業後の進路」(<https://www.tokyo-kasei.ac.jp/graceful/carrer/cource.html>, 2023.12.11 閲覧)
- 倉矢匠 (2016) 「日本における促進指向的及び抑制指向的ジェンダー規範」『東洋大学大学院紀要』53 集, pp.107-124.
- 山本展裕・内山充 (2002) 「日本における薬剤師需給の予測に関する研究」『薬学雑誌』Vol.122, No5, pp.309-321.